

より開かれた漁業を目指して —地区と漁業者との交流のススメ—

小串漁協青壮年部
部員 大西広志

1. 地域と漁業の概要

私の住んでいる小串地区は岡山市の最南端部に位置し、海岸線に民家が散在する閑静な地域であり、花や野菜を主体とした農業、古来より地区の伝統産業である漁業が盛んで、金甲山や貝殻山等の風光明媚な地形を生かした観光地としても知られている【図1】。

小串漁協は正組合員39人、准組合員60人の計99人で構成されており、漁業経営体は、ノリ養殖19経営体、小型定置網11経営体、小型底びき網8経営体となっている。冬には組合員のほとんどがノリ養殖に従事しており、平成9年度における組合の総水揚げ高2億6千613万円のうち、ノリが2億5千130万円と全体の約94%を占めている【図2】。

2. 研究グループの組織と運営

小串漁協青壮年部は、昭和58年に発足し、現在25歳から51歳までの組合員10人で構成され、全員がノリ養殖業を営んでいる。

主な活動内容は、将来の漁家経営を模索すると同時に、ノリ養殖の裏作として新規漁業の導入を図るため、協業によるアオノリ養殖に取り組んだり、漁船漁業の復興と地先の資源量回復を目指し、クマエビの中間育成を実施する等、積極的な活動を展開している。

3. 実践活動課題選定の動機

小串地区では過疎化による漁業者の減少、高齢化が深刻な問題となっており、現在、担い手の確保が喫緊の課題とされている【図3、図4】。

そこで、我々は、『担い手を確保するには何が必要か』ということについて検討した結果、漁業では、3Kといわれる労働条件や所得の不安定さに起因するマイナスイメージが担い手を確保する上で最大の障壁と考えられることから、まず、このマイナスイメージを取り除こうということになった。

漁業は、肉体的に負担の大きい職種であることに違いないが、独自の考え方を経営に反映しやすく、地道な努力の積み上げがそのまま成果として実を結ぶ等、一般のサービス業と異なり、やりがいのある職種であることも事実だと我々は考えている。このことが、一般の人に広く理解されれば、漁業に対するマイナスイメージは払拭され、担い手の確保にも繋がる。それには、漁業者自らが漁村の閉鎖性を打破し、地区の人々と幅広く交流することで、漁業に対する人々の理解を今以上に深めることが必要である。我々は、担い手確保に向けた取り組みの第一歩として、『地区と漁業者との交流のススメ』を実践するため、人々との交流を目的とした小串観光朝市、若者との交流や担い手確保を目的とした小串小学校のつぼ網（小型定置網）体験漁業に取り組むことにした。

4. 実践活動の状況及び成果

小串地区では、過疎化、核家族化の進行により、住民の間での交流がなくなりつつあつ

たことから、昭和 52 年、地区の観光協会が、地域振興の起爆剤として、また、地区住民の交流の活性化を目的として、観光協会会員自らの手による朝市を計画した。併せて、会員をより広い職種から募集し、地区住民の交流促進を目的とした観光協会の再編成も実施されることになった。我々は、地区との交流を拡大する絶好のチャンスと考え、漁業者 15 名が会員となり、朝市の開催に向けて積極的に取り組むことにした。観光協会は再編成の結果、人数が約 80 人に増強され、漁業者、会社員、農業者、公務員など多様な分野の人々で構成されることになった【図 5】。

観光協会での打ち合わせの結果、朝市は、小串地区の特色を全面に押し出そうということで、水産物の販売をメインに実施することとなり、水産物の出荷は漁業者が担当することになった。水産物のほかにも花や野菜等の農産物の販売も検討され、農業者に協力を要請すると同時に、販売は観光協会会員が行うことになった。多くの人に参加してもらうため、毎月第 2 日曜日に朝市を実施することや、会場は地区になじみ深い観光施設である国民宿舎桃太郎荘を使用することが決まる等、準備は着々と進んでいった。

我々も朝市を少しでも盛り上げようと、漁業者が出来ることについて話し合った結果、水産物の種類を少しでも増やすため、鮮魚はつぼ網と底びき網の漁業者双方から出荷してもらうほか、特産品であるノリも出荷することにした。また、味付けノリの販売には漁協婦人部に協力を依頼する等、組合を上げて朝市に取り組むことで意見が一致した。

そして、昭和 52 年、ついに地区ぐるみの手作り朝市がスタートする事となった【写真 1～3】。このような地区でまとまった朝市が、定期的で開催されるのは、岡山県では初めての試みであったが、小串観光朝市は開催当初から好評で、特に、鮮魚は毎回、朝市開始後約 30 分で完売してしまう程の盛況ぶりであった。宣伝活動も功を奏し、開始から 22 年経った今では、備前市や早島町など遠方からの来客も望めるようになった。

朝市が地区の行事として定着してゆくにつれ、『漁業は観光資源としても重要』という認識が人々の間に浸透し、漁業に対する人々の理解が次第に深まっていった。我々は、『閉鎖的だった漁村の扉が着実に開き始めた』そう感じた。その結果、朝市を通じて小串地先のつぼ網漁が多くの人に知られることとなった。そして、約 15 年前から、地区の父兄より小串漁協に、キャンプや野外活動の一環として、子供達につぼ網の網揚げを体験させてほしいとの依頼が相次いだ。さらに、国民宿舎桃太郎荘から小串漁協に施設の利用客を対象とした観光つぼ網漁が依頼される等、小串地区の漁業を代表する漁法として、つぼ網漁は地区の人々にとってなじみ深いものとなった。

これらの取り組みは、やがて地区の小学校の先生の知るところとなり、先生方の間からも、『是非、子供達につぼ網漁を通じ漁業について学ばせたい』という熱烈な要望があがった。我々は、これが子供達に漁業を PR する良い機会になるだけでなく、担い手の確保にもつながると考え、先生方と一体となり、つぼ網体験漁業に取り組むことにした。そして、平成 5 年から小串小学校の課外授業として、つぼ網体験漁業は毎年 5 月の連休に実施されることになった【写真 4】。

つぼ網体験漁業は、まず、組合員がつぼ網の模型を使用して、生徒につぼ網の構造や漁法について説明を行う【写真 5】。次に、魚の絵と捕獲に関する体長制限の記入された下敷を配布し、漁獲される魚の名前や体長制限等の規則、さらに、この規則により水産資源が守り育てられている等、資源管理についても説明する。説明が終わるといよいよ網揚げ

である。生徒とその父兄が船に乗って沖へ移動し、網揚げを見学する。70cm を越すスズキやクロダイが網のなかで激しく暴れ水しぶきを上げれば、始めて目にする光景に子供達だけでなく父兄までもが我を忘れて大喜びである【写真 6】。獲れた魚は、相引港で生徒が自ら調理を行う【写真 7】。まず、先生がお手本よろしくスズキを 3 枚におろすと、生徒もそれに習って自分で魚を捌いてみる。最初は恐る恐るであるが、慣れると結構器用なもので、料理の仕上がり具合は写真のとおりである【写真 8】。生徒達はスズキの洗いやゆがしたてのガザミ等、普段あまり口にする事のない新鮮な海の幸に舌鼓を打っていた【写真 9】。このように、つぼ網体験漁業では、生徒が楽しく漁業を学ぶだけでなく、新鮮な地物の魚を食べ『本当の魚の味』について知ってもらえることから、魚食普及にも役立つと自負している。

5. 波及効果

まず、観光朝市への取り組みでは、地区との交流が促進され、人々の漁業に対する理解を深める良いきっかけとなった。しかし、何より重要なことは、漁業に対する人々の深い理解が得られた結果、小学校の課外授業でつぼ網体験漁業が実施されることになり、漁業者が地区の教育の一端を担う等、その活動範囲が教育の分野にまで広がったことである。

次に、つぼ網体験漁業への取り組みでは、普段、子供達があまり接する機会のない漁業者との交流が可能となり、子供達の漁業に対する理解が以前より深くなると同時に、生徒が楽しみながら漁業を学ぶため、漁業が子供達に良いイメージで受け入れられるようになった。平成 8 年には、県北からも小学生が体験漁業に訪れ、山間部の子供達にも楽しく漁業を知ってもらうことが出来、大変好評であった。今や、小串地区のつぼ網漁は、地区を越えた人々との交流にも一役買っている。

これらの取り組みを通じて、我々は、観光、教育等、漁業とは直接関係のない多くの分野において、我々が果たしうる役割の大きさを実感することが出来た。これにより、我々組合員の間にも、漁業を通じて地区に貢献出来るという新たな意識が芽生え、自らが漁業者であることに対する誇りが以前にも増して持てるようになった。

平成 6 年度以降、後継ぎ型ではあるものの、毎年 1 人ずつ、新規就業者が加入していることは、我々の取り組みが実を結びつつあることを伺わせる。

6. 今後の課題

我々の担い手確保に向けた取り組みの第一歩、『地区と漁業者との交流のススメ』は着実に成果を上げており、今のところ順調と考えている。

しかし、私はこれだけでは不十分で、担い手の確保をより確実なものとするため、今後は経営安定化にむけた取り組みが必要と考えている。漁業が、いかに魅力ある職種として多くの人に理解されたとしても、安定した収入が補償されなければ、安定的な担い手の確保は困難であると同時に、漁業は真に魅力ある職種とは言えない。

漁業を真に魅力ある職種とするには、安定した経営基盤と将来を見据えた経営戦略の確立が急務である。我々は、ノリの漁閑期に協業によるアオノリ養殖を実施する等、経営安定化や将来の漁家経営の模索に向けた新たな取り組みを、すでに開始しているが、今後とも組合員が一丸となり、担い手確保への取り組みを継続して行きたいと考えている。

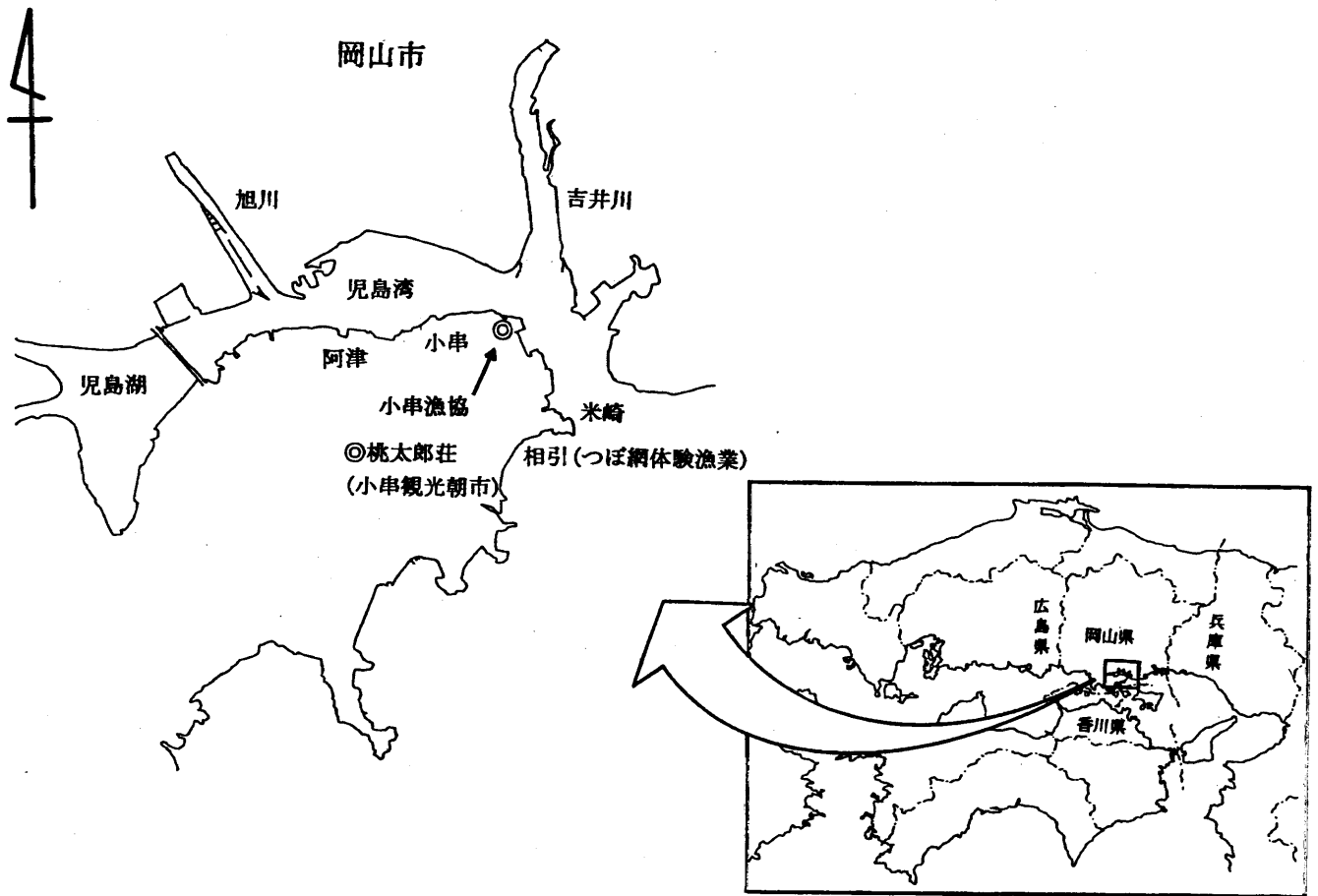
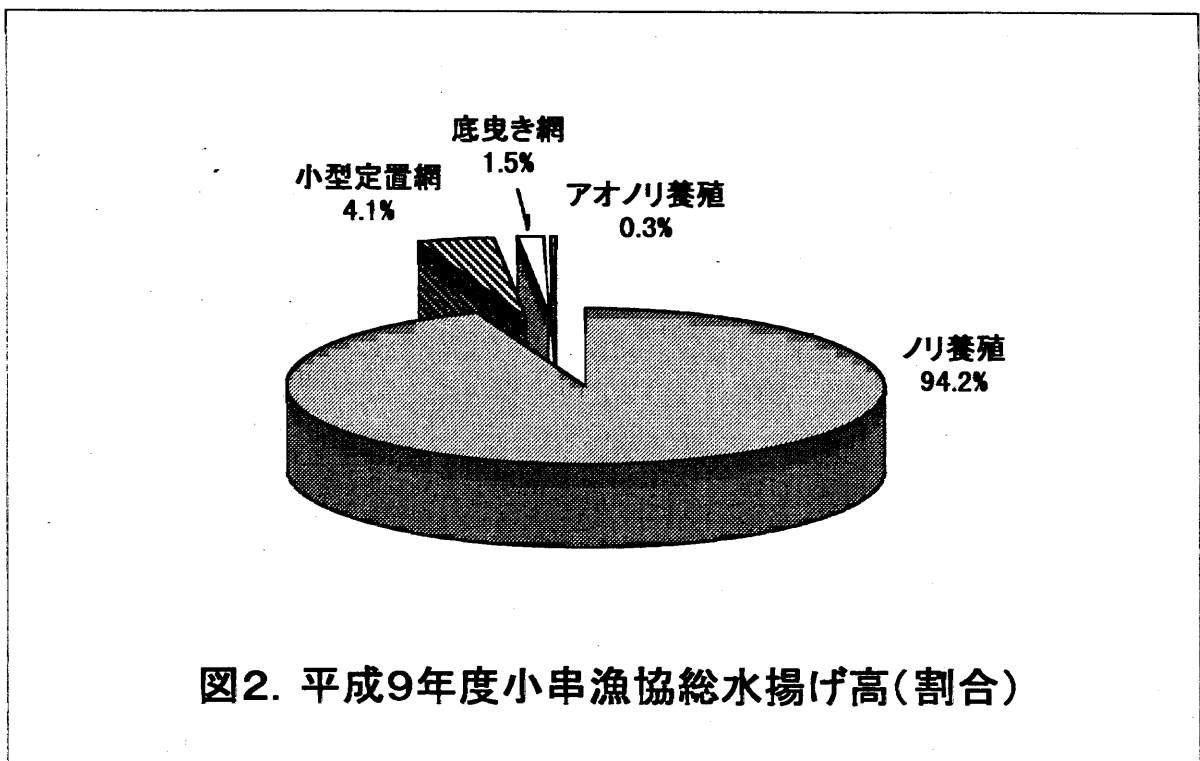
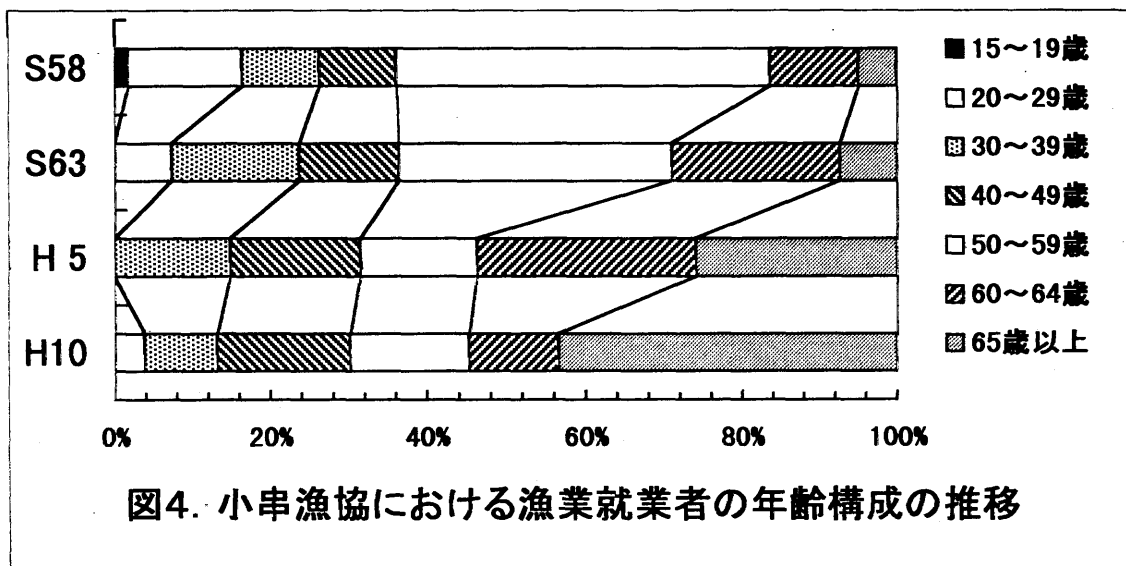
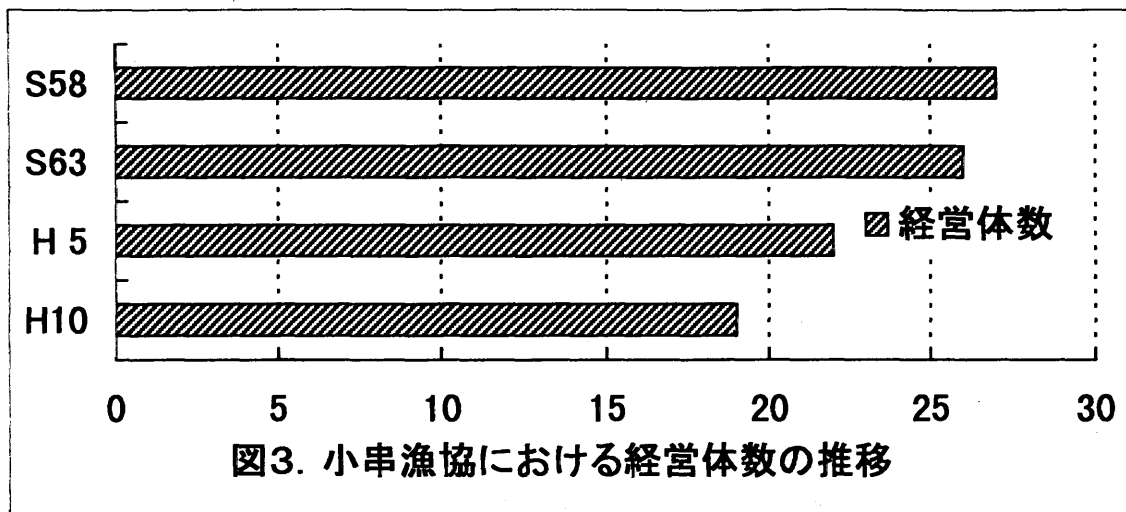


図1.地域の概要





小串観光朝市について

1. 観光朝市について

- ・実施主体：小串観光協会
- ・日 時：毎月第2日曜日早朝
- ・場 所：国民宿舎鮫大船荘
- ・出荷物：鮮魚、花及び野菜

2. 朝市開催の経緯

地区の過疎化、核家族化、業種が多様化

↓

住民間の交流が減少、地区のまとまりの低下

↓

地域振興の起爆剤、住民の交流促進を目的に朝市を計画

↓

住民の交流促進を目的として観光協会も再編成

↓

小串観光朝市の実施

3. 小串観光協会について

- 1) 設立：昭和45年
- 2) 人数：77名（H10現在）

内訳

会社員	33人
農業者	12人
漁業者	11人
会社経営	8人
公務員	6人
その他	7人

図5. 小串観光朝市について



写真1. 小串観光朝市全景



写真2. 鮮魚販売コーナー



写真3. 花卉販売コーナー

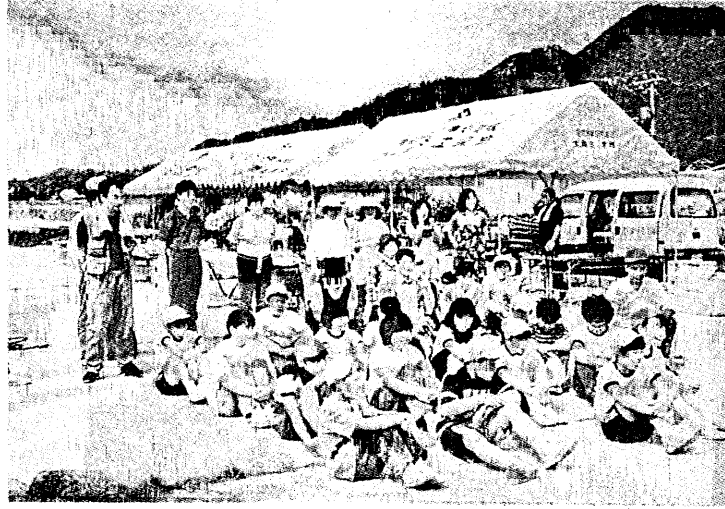


写真4. つぼ網体験漁業実施状況

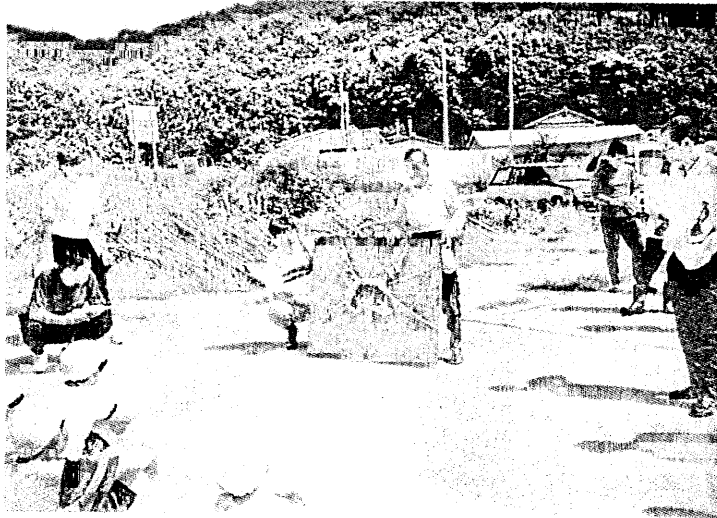


写真5. つぼ網に関する説明状況

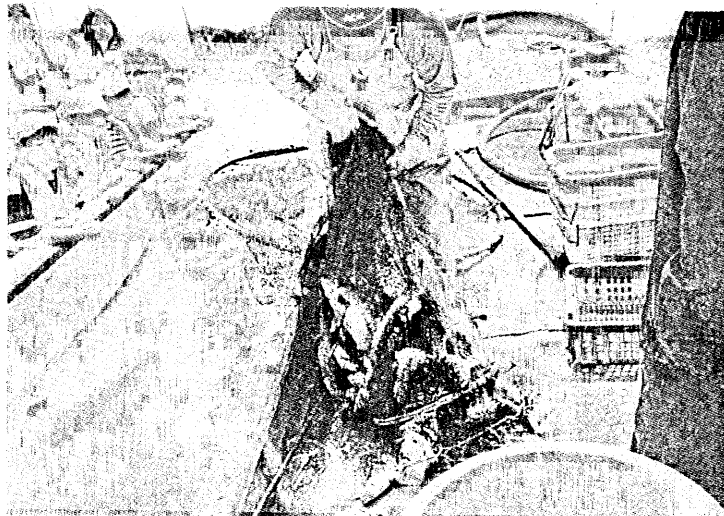


写真6. つぼ網の網揚げ状況

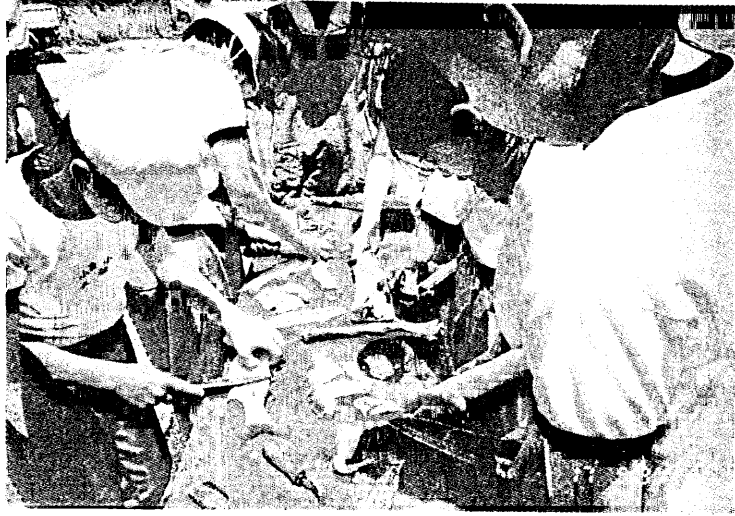


写真7. 獲れた魚の調理状況

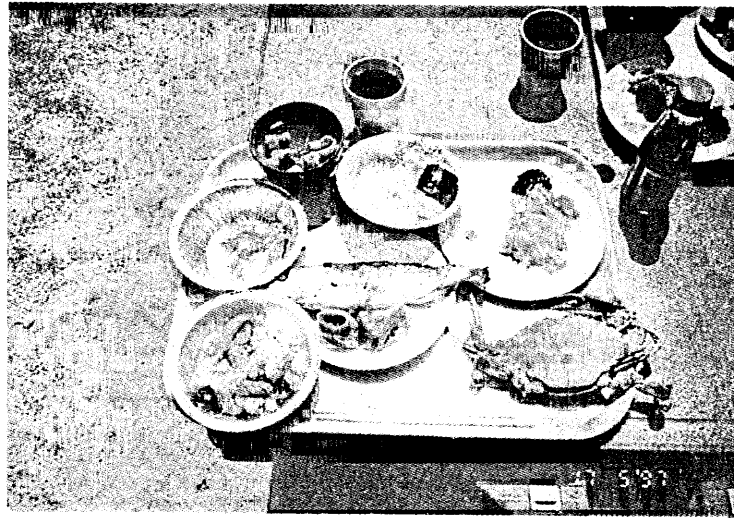


写真8. 料理の仕上がり具合



写真9. 食事風景